

# 介護福祉におけるレクリエーション援助の実態に関する研究

—10年目を迎える介護福祉士養成校とその卒業生に注目して—

松永敬子（一宮女子短期大学）

## 1. はじめに

1987年に「社会福祉士及び介護福祉士法」が制定され（施行は1988年）、まもなく10年目を迎えようとしている。2025年には、高齢化率（65歳以上の人口の割合）が25%とも予測され、高齢社会への対応が懸念されている中、社会福祉士及び介護福祉士においてもこの10年間、大きな期待と注目を浴びてきた。施行当初は全国で6校のみであった介護福祉士養成校は、214校242課程（1996年4月1日現在）にまで増え、平成8年度開校及び課程開設は全国で48件にものぼり、今後も多数の介護福祉士を世に送り出していくものと考えられる。介護とは、日常生活動作の補助や援助にとどまらず、健康管理、社会活動の促進、援助、そして、人間としての文化的な生活レベルの保障までを含めた「心豊かな生活」を送るための援助をすることであると考えられる。このような援助活動の中に、レクリエーションが介護福祉士養成課程必修科目の「レクリエーション指導法」として位置づけられたのは、周知の通りである。必修科目としての「レクリエーション指導法」についても、まもなく10年目の節目を迎えるにあたり、改めて介護福祉におけるレクリエーション活動の現状を把握することは非常に重要であると考えられる。そこで、本研究では特に、多くの介護福祉士を送り出している介護福祉士養成校に注目し、介護福祉士養成校のレクリエーション指導法担当者と介護福祉士養成校を卒業し、現場で活躍している現役の介護福祉士を対象に、介護福祉におけるレクリエーション援助に関する内容を中心に実態調査を試みた。本研究では、養成校のレクリエーションに関する教育（指導）内容と介護福祉の現場のレクリエーション援助内容について相違があるのではないかという仮説をもとに研究を進める。

本研究の目的は、介護福祉士養成校のレクリエーション指導法担当者に対し、介護福祉におけるレクリエーション援助に対する考え方や授業内容について明らかにすると同時に、養成校を卒業した介護福祉士についても、介護福祉におけるレクリエーション援助の考え方や現場で必要なレクリエーション援助内容及び養成校に対する要望を把握し、両者のギャップを埋めるための基礎的資料を得ることにある。つまり、それらの資料を養成校にフィードバックすることで、養成校の一方通行的な教育（指導）をより現場の実践に即した教育（指導）へと転換させる手がかりとなることが本研究の終局的な目的であるといえる。

## 2. 研究方法

本研究は、全国の介護福祉士養成校（214校242課程）のレクリエーション指導法担当者と介護福祉士養成校を卒業し、各方面で活躍している介護福祉士315名を対象に郵送法による質問紙調査を実施した。現役の介護福祉士については、昭和63年開校の養成校A短期大学卒業生と平成元年開校の養成校B専門学校の卒業生で介護職に就いている者を対象に質問紙調査と数名の面接調査を実施した。調査期間は、1996年12月（面接調査）から1997年

2月で、有効標本数及び回収率は、養成校レクリエーション担当者が79名、36.9%、養成校卒業生の介護福祉士は126名、40.0%であった。尚、養成校214校のうち48校（課程も含む）が平成8年度に新設されたため、「レクリエーション指導法」は現時点では開講されていないという点と、「指定校規則第7条3項」に該当する場合、レクリエーション指導法の授業は正規には実施されていない養成校もあるため、有効標本数及び回収率に影響を及ぼしているものと考えられる。

### 3. 結果及び考察

#### (1) 調査対象者の属性

表1は、介護福祉士養成校のレクリエーション担当者（以下、レク担当者）の属性を示したものである。また、表2は、介護福祉士養成校を卒業した現役介護福祉士（以下、卒業生）の属性を示したものである。まず、表1のレク担当者については、男性が約6割を占めていることが分かる。平均年齢は51.1歳で、年齢階層別では、60歳代が全体の約3割を占めていることが大きな特徴であるといえる。次いで、40歳代、50歳代のそれぞれが約2割を占め、20歳代においてはわずか4.6%という低い数値を示した。また、年齢に伴いレクリエーション関連の従事年数も20.7年と非常に長い。養成校自身が新しいため4.5年であった。また、介護福祉におけるレクリエーション指導に役立つ資格についての回答は、レクリエーション・コーディネーターが全体の40.5%、レクリエーション・インストラクター、福祉レクリエーション・ワーカーがともに25.7%と続いている。これらの数値から、介護福祉におけるレクリエーションは、一般のレクリエーションとは違い、長いキャリアの中で培われたレクリエーションの経験が求められる分野であるということがいえる。また、高齢社会に向けて、若手のレク担当者の育成が急務であるといえ、今後の大きな課題であることが指摘される。次に、表2の卒業生について見ると、女性が全体の約9割を占めていることが分かる。平均年齢は24歳で、介護職従事年数は、約3年である。勤務先は、特別養護老人ホームが圧倒的に多く、65.5%であった。一方、養護老人ホームと軽費老人

表1 養成校「レクリエーション指導法」担当者の属性

| 調査項目             | レク担当者<br>(n=79) |       |
|------------------|-----------------|-------|
| 性別               | 男性              | 59.1% |
|                  | 女性              | 40.9  |
|                  |                 | 100.0 |
| 婚姻               | 既婚              | 85.9% |
|                  | 独身              | 14.1  |
|                  |                 | 100.0 |
| 平均年齢             | 51.1歳           |       |
| 年齢階層             | 29歳以下           | 4.6%  |
|                  | 30～39歳          | 13.8  |
|                  | 40～49歳          | 26.1  |
|                  | 50～59歳          | 23.1  |
|                  | 60～69歳          | 29.4  |
|                  | 70歳以上           | 3.0   |
|                  |                 | 100.0 |
| レク関連従事平均年数       | 20.7年           |       |
| 養成校担当平均年数        | 4.5年            |       |
| 養成校雇用形態：専任       | 専任              | 48.4% |
|                  | 非常勤             | 51.6  |
|                  |                 | 100.0 |
| 取得資格：レク・コーディネーター | レク・コーディネーター     | 40.5% |
|                  | レク・インストラクター     | 25.7  |
|                  | 福祉レクワーカー        | 25.7  |
|                  | 中高教諭（保体）        | 21.6  |
|                  | 介護福祉士           | 6.8   |

特別養護老人ホームが圧倒的に多く、65.5%であった。一方、養護老人ホームと軽費老人

ホームは非常に少なく、デイサービス関連についても約1割を占めるに留まった。また、調査対象校の1つがレクリエーション・インストラクターの課程認定校であったため、レクリエーション・インストラクターの資格所持者は全体の25.4%であった。本研究では、養成校を卒業した介護福祉士を対象にしており、介護職従事年数についても最長で7年ということもあって、比較的若い独身女性が約8割を占めているのが特徴である。

### (2) 介護福祉におけるレクリエーション援助の重要度

レク担当者の約9割は、介護福祉においてレクリエーションは非常に重要であると考えているのに対し、卒業生は約5割に留まっていることが分かる。いずれにしても、まあ重要であるという数値を合わせるとレク担当者はもちろん、ほとんどの卒業生もレクリエーションの重要性を強く認識していることが明らかになった。

### (3) 介護福祉士養成校の「レクリエーション指導法」の授業内容重要度

介護福祉士養成テキスト「レクリエーション指導法」の3冊の文献<sup>1) 2) 3)</sup>から授業内容

14項目を設定し、レク担当者と卒業生に対し重要度について「5.非常に重要である」「4.まあ重要である」「3.どちらでもない」「2.あまり重要ではない」「1.全く重要でない」までの5段階評定尺度で示し、その回答を間隔尺度と仮定した。この数値をそのまま得点化して平均値を算出しt検定を行った。レク担当者についてみると、「ニュースポーツ・軽スポーツの実践」以外はすべて高い数値を示している。しかし、卒業生では、実技系に重要度が偏り、理論系が軽視されている傾向にある。レク担当者と卒業生の間に大きな開きが見られたのは、「レクリエーションの概念と意義」「社会福祉におけるレクリエーションの役割」「介護従事者とレクリエーションの関わり」「レクリエーション活動の前提となる諸要素について」「セラピューティックレクリエーションについて」の理論系の5項目で、すべて1%水準で有意差が認められた。逆に、卒業生は、現場で即戦力として活躍できることを前提にしているためか、高齢者や障害者向け及びデイサービス向けのレクリエーションの実践などの重要度が非常に高く、担当者の数値を上回っていることが分かる。

表2 介護福祉士養成校卒業生の属性

| 調査項目                |        | 卒業生<br>(n=126) |
|---------------------|--------|----------------|
| 性別                  | 男性     | 12.5%          |
|                     | 女性     | 87.5           |
|                     |        | 100.0          |
| 婚姻                  | 既婚     | 18.3%          |
|                     | 独身     | 81.7           |
|                     |        | 100.0          |
| 平均年齢                |        | 24.0歳          |
| 年齢階層                | 29歳以下  | 96.8           |
|                     | 30～39歳 | 1.6            |
|                     | 40～49歳 | 0.8            |
|                     | 50～59歳 | 0.8            |
|                     |        | 100.0          |
| 勤務先：特別養護老人ホーム       |        | 65.5%          |
| 養護老人ホーム             |        | 0.8            |
| 軽費老人ホーム             |        | 0.8            |
| デイサービス関連            |        | 9.2            |
| 老人保健施設              |        | 5.0            |
| 公務員（福祉関連）           |        | 5.0            |
| その他                 |        | 13.7           |
|                     |        | 100.0          |
| 介護職従事平均年数           |        | 2.9年           |
| レクリエーションインストラクター取得者 |        | 25.4%          |

#### (4)介護福祉士養成校で学んだ「レクリエーション指導法」の福祉現場での活用度

養成校のレクリエーションの授業内容が、実際の現場で活用されているか否かについて、レク担当者には予測で、卒業生には本音で回答していただいた結果、レク担当者では、レクリエーションの授業が活用されていると認識している人が8割以上いるのに対して、卒業生の約6割は、あまり活用されていないと答えている。回答の数値4段階評定尺度を間隔尺度と仮定し、平均値によってt検定を行っても、平均値が3.07を示し「まあ活用しているであろう」というレク担当者の予測を裏切る形で、卒業生の数値は2.36と「あまり活用していない」という傾向にあることが明らかになり、1%水準で有意差が認められた。しかし、この数値は、あくまでも今回の調査対象の場合であって、すべての養成校においてこのような結果が出るとはいえないが、ひとつの目安として受け止める必要があると考えられる。この結果から、養成校のレクリエーションの授業内容と現場でのレクリエーション援助活動の間には大きなギャップがあることが明らかになった。養成校のレクリエーションの授業は必ずしも現場ですぐに実践できる内容だけを行わなければならないとはいえないが、できればその方が望ましいという考えで考察を進めると、このギャップを埋めること、つまり卒業生にとって介護の現場で活用できるレクリエーション援助活動とは何なのか、現在の授業内容が現場で活用されないのはなぜなのかという問題を明確にすることが今後の大きな課題であるといえる。

#### 4. 結論

本研究の結果、介護福祉においてレクリエーション援助は非常に重要であるという見解は一致するものの、養成に必要な内容や重要な授業内容には、大きな意見の相違が見られた。今回の調査では、レク担当者は、指導者として理論にも実技にもバランスよく重点を置いているものの、卒業生は、現場ですぐに実践できる内容に重点を置く傾向が見られた。そして、最大の問題点は、レク担当者が現場で活用されていると思っている授業内容が実際には活用されていないという事実をどの様に受け止めるかという点である。今後の課題としては、まず、学生が敬遠しがちな理論の授業展開を工夫し、即戦力として援助できるレクリエーションを教授することが大切である。

また、この結果を養成校にフィードバックすることで、養成校の一方通行的な教育（指導）をより現場の実践に即した教育（指導）へと転換させる手がかりとなるものと考えられる。

#### 参考文献

- 1)介護福祉士養成講座編集委員会 1991 『介護福祉士養成講座6 レクリエーション指導法』 中央法規出版 pp3-166
- 2)垣内芳子・大場敏治・園田碩哉編 1990 『介護福祉選書・6 レクリエーション指導法』 建帛社 pp2-200
- 3)吉田圭一・茅野宏明 1990 『セミナー介護福祉6 レクリエーション指導法』 ミネルヴァ書房 pp1-143